

イギリスの生活と文化

大塚 祚 保

私は、'96年4月から'97年3月まで、イギリスの Colchester (コルチェスター) にある Essex 大学に留学した。この留学で得た経験は、文化比較あるいは都市政策という角度から考えてみたいと思いメモしておいたので、その一部を以下にまとめてみた。なお、以下に描くさまざまな生活体験は、イギリス一般というより、コルチェスターあるいはエセックス地方での一事例ということかも知れないので、おことわりしておきたい。

イギリスと日本とのマクロな文化比較から、その相違性を考えていきたい。

イギリスは、日本よりわずかに小さな島国であり、人口は日本の半分弱であり、北海道ぐらいの緯度がある。従って、気候的には寒いはずであるが、メキシコ海流と偏西風の影響で比較的的温暖性である¹⁾。

動植物は、日本の北海道または中部の高度1,000~1,500メートル以上の八ヶ岳や上高地あたりと比較的に似ている。ポプラ、プラタナス、白樺などの木々が公園や一般家庭に多く見られる。小鳥なども、カモ、白鳥、リス、スズメ、ハト、カモメなど、ほぼ日本と類似するものが多い。

イギリスは、アイルランドの一部を除き、全国的にフラットの国であり、一面に広大な田園風景が広がり、行けども行けども同じ景色の広大な畑地や牧場が多い。日本の北海道の面的な広大さが、イギリスの全土をおおう特色であると考えてよい。このイギリスのフラット性は、山の多い日本との大きな相違点といえる。

イギリスの可住地は、7割余といわれる。ところが、日本の可住地は3割余で、残りは、傾斜度15度以上の人の住めない山間地域である。人口が半分弱で、可住地が倍以上のイギリスは、日本と比べ、人口密度が相当低いものといえる。このことは、日本と比べイギリスが平面的に広がりのある国であることにもなる。車窓から見るイギリスの広大性は、こうした地形から由来しているものである。

イギリスは、分散型社会であると考えたい。これに対して、日本は集中型社会である

といえる。日本の大都市には、過度の人口が集中しているが、イギリスでの集中は、そうひどくはない。ロンドンでのラッシュ時でも、日本のスシ詰め状況は、想像もできない。コルチェスターからロンドンへの電車は、通勤時間帯でもほぼ全員が座っている。中では机のある座席にサラリーマンが書類を広げ、仕事をしている光景すらみられる。平常時では、4人がけの座席に2人が座り、なお、十分にすいているという状況である。

都市の人口は、一部の大都市を除き、多くて40~50万人、4~5万人からそれ以下の人口が最も多いという状況である。それらの都市は、広大な地域に点在して立地し、それぞれ個性ある都市づくりを展開している。日本のような画一的な都市は、あまり見当たらない。

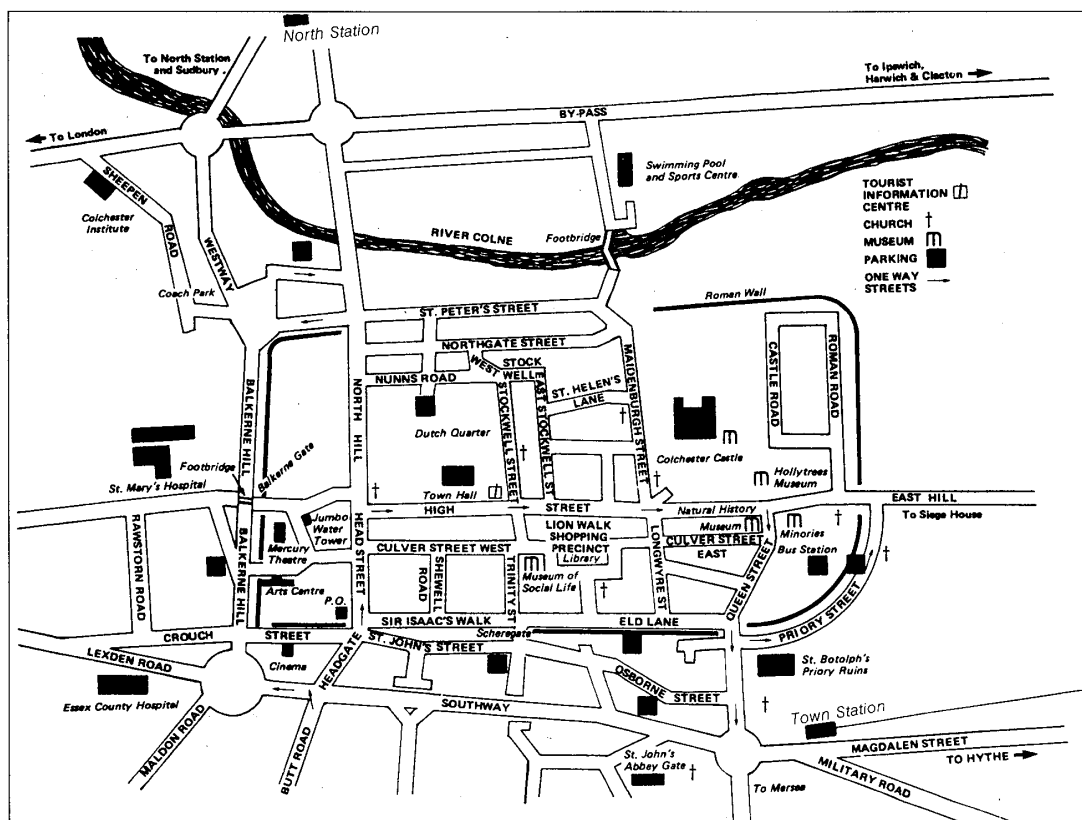
イギリスは、イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの4つの国からなる連合国で、The United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland (U.K.)²⁾がその正式名称である。近年、イングランドとウェールズは、多くの点で共通性が多いが、北のスコットランドやアイルランドは、南部地域とは、なお、文化や言語などの相違が多い。英語のなまりやアクセントも大いに違っているようである。とくに、スコットランドは、イングランドへのライバル意識に近いと思われるほど、スコットランドを主張する姿勢が強い。

法制度などは、今日でも4つの国でそれぞれ制定することが前提となっており、イングランドの国会で制定されたものが、その多くは、それに準じて、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドで行われるという手続となっている。近年では、イングランドとウェールズでの共通点が多いが、その場合、法律等には、必ず、——in England and Wales と記されている。

たとえば、地方自治制度は、4つの国が別々であり、地方団体の名称すら違うという状況である。近年の制度改革では、全国的に共通性をもたせているが、なお、相違点も多い。この4つの国からなる連合国であることが、分散型社会のシステムを作る根底にあるものであろう。

コルチェスターは、ロンドンから北東に50キロ余のところにある人口15万人の郊外都市である。1,000年余に作られたといわれるレンガと石の古城があり、その周囲を Wall が囲んでいる。周囲約4キロで、徒歩で約1時間を要する。この Wall の中にあるローマン時代の遺跡、教会などの建築物は、保存、修復され、観光施設となっている。その他は、商店と事務所があり、このウォール内の全体が観光客や買物客を集約するタウンセンターである(図参照)。なお、古城を中心としたウォールによる街づくりは、中央部のチェスター市やヨーク市にも見られ、イギリスの古い都市の特徴ともいえる。

コルチェスターは、1189年に王 Richard I 世により Charter (憲章) を受け、特別自治市の Borough (バラ) として今日に至っている。これは、イギリスでも最も古い都市の一つで、「Britain's Oldest Recorded Town」³⁾として PR されているほどである。

 Colchester Town Center


ウォールの中は、現在、商店・事務所および Dutch Quarter (グッチ・コート) といわれる住居地となっており、それ以外の土地利用はきびしく規制されている。観光客が周辺地域から多く訪れるが、このウォール内を歩き、ショッピングしていくのである。日常、市民は、このウォール内にある商店街で買物することとなる。私は、グッチ・コートの一部のアパートで留学生活をしてきた。

Essex 大学は、コルチェスターの郊外、バスで20分余のところであり、30年前に作られた新設の国立大学である⁴⁾。大学は16学部約5,500名(学部4,100名、大学院1,400名)の学生をもち、このうち100カ国からの外国人学生が全体の40%余を占めるといふ国際色豊かな特色をもつ。日本人学生は150名余である。大学は、Wivenhoe Park の中にあり、200エーカーという広大なキャンパスに Oak の100年以上の大木がたくさん植えられた緑多いところである。

大学には、校舎、事務室、図書館、保健センターなどの他に、14階建・6棟の学生寮、スポーツセンター、テニスコート、駐車場などがある。この他、シアター、ホテル、本屋、生協、ポストオフィス、バー、軽食などがあり、一つのタウンを作っている。この他、大きな池が2つある。

学生は、第一年度目を学生寮で生活することができるので、相当数の学生が学内に居

住しており、学内は夜間人口をかかえたタウンである。そのためか、図書館は夜10時まで、バーは11時ぐらいまで開館している。一部の施設は、日曜日も開かれている。広大なキャンパスは芝生におおわれているため、野うさぎ、リスが多く、さらに二つの池には、白鳥、カナダガン、バン、カモ、カモメなどの多くの野鳥が生息している。

私は、Essex 大学政治学部客員教授として迎えられた。図書館、情報センターは自由に使用可能で、メールボックスのキーを与えられた。但し、研究室は空室待ちという条件付きで、結果的には空室がなかったようである。これといったノルマはないが、帰国前に研究発表するようになるのではないかと考えている。

1. 市民生活

アパート探し

留学生活で最初に出合った難問は、アパート探しであった。現在のロンドン近郊では、留学前の日本で、アパートを予約しておくことができる状況にある。私は、それを知りながら、あえてイギリスにてアパート探しから始めることとした。

コルチェスターのレッドライオン・ホテルに一週間、その後のホームステイに一週間で、この間、ずーとアパート探しをしていたことになる。まず、どこに住むのがベターなのかという立地条件が皆目わからない。大学のアコモデーション・オフィスでは、Wivenhoe にたくさんあると紹介してくれた。大学の教師、学生などの多くは、静かなウィベンホーに喜んで住むという。しかし、車のない私には、不便すぎて買物一つがむずかしい。

大体、家については、私を Essex 大学に紹介した H 先生は、「貸家の一軒家が安いので、それを借りて生活するのがよい」と助言してくれた。しかし、妻との二人ぐらして、しかも妻は3カ月に一度のペースで日本に帰国するというスタイルの場合、食料などの買物を考えると、街の中心に近く、スーパーなどが手近にあるところしかないと考えた。

そこで不動産屋には、「コルチェスターのタウンセンターから5分以内のところ」を条件として家探しをした。結果としては、ハイストリート（日本の銀座通りのような名称で、ほぼ中心地区をいう）から3分余のダッチ・コート地区に3室のアパートを見つけた。Furnishment（家具付き）アパートのコートである。家具付きアパートとは、応接セット、ダイニングセット、コーヒーテーブル、洗たく機、オーブン、冷蔵庫などから食器セット一式まで、ほぼ生活用品のすべてが付いている。必要なのはフトン一式ぐらいで、私の仕事机などのように特別に必要なものを一部購入するぐらいで、すぐに生活できるようになっている。我々のように期限付きの生活をする人間にとっては、便利なシステムである。

なお、このアパートの契約に当っては、ファニッシュ家具の内容を詳細に記した Inventory (財産目録) をとり交した。これは、室や家具の内容の状況を詳細に示したもので、たとえば、床のジュータンのシミの数、ガラスのヒビなども含めたものである。これは、入居時の室内の状況を記録して確認すると同時に、退出時の状況をチェックし、家具の不足、破損に応じた損金支払の根拠となるものである。

室代は月440ポンド (約8.5万円)、これに電気、水道、下水道、電話などを加えると、諸経費は10万円をこえる。なお、イギリスでは、アパートを借りても約1割の税金が課税される。この不動産屋とは、さまざまなことをブロークンな英語で交渉したが、その担当のP氏とは、イギリス人の最初の友人となる。

Sorry と Thank you

イギリスでの生活で出合う光景の一つは、ドアの開閉における「Sorry」のあいさつである。ドアを開け、次の人のくるのを見て、開けて待つのである。この時、次の人は、ソーリィまたはサンキューと「礼」をすることが常識となっている。

人によっては、次の人が遠くの方にいるのに、早く来いとばかり、ドアを開けて待っている。我々日本人は、この習慣がないために、うしろを見ないでついに戸を閉めてしまう。次の人が続いて来てバタと戸が閉まり、ひんしゆくを買うことになる。

ソーリィやサンキューと声をかけ合い、あいさつをすることは、お互いの関係がなごみ人間生活をやわらげる働きをする。忙がしい日本では、こういうことをついぞ忘れ、「日本人の後には注意しろ」などといわれかねないこととなる。

なお、あいさつについては、散歩でよく言われることがある。夕方、公園などを散歩すると、同年配の男性と目が合うと、「ハロー」、「グッド・イブニング」、朝の場合には、「グッド・モーニング」などのあいさつをされる。この一声で、自然に互いを確認し合い、話がはずむ場合すらあり得る。

要するに、こうしたあいさつは、人間関係を円滑にするための生活のチエともいえる。我々のような外国人に対しても、同等にあいさつすることが、国際社会におけるマナーなのである。

イギリスの食事

日本を出発する前に、イギリスの本を読んでわからなかったことの一つは、イギリスの食事がおいしくない理由であった。歴史ある世界の国では、フランス料理、中華料理、日本料理が代表とされるが、何故、イギリス料理がないのかわからない。さらには、どの本をみてもイギリス料理は、どちらかといえば、「まずい」という書き方であったと思う。なぜなのか、この疑問を考えてみたい。

まず留学生活を通しての食事についてのエピソードからのべてみよう。一つは、ブレ

ック・ファーストである。ホテルの一週間、私は、下痢のしっぱなしであった。日本での平生は、好ききらいなく食べていたのに、その理由の一つは、油ではないかと考えている。二週間食べたブレック・ファーストは、大きな皿に油であげた魚か肉、油のポテト、大きな油であげたソーセージ、ベーコン、ブラック・プディング（黒い血の腸づめ）、それにトマトソースのビーンズ、そしてわずかなトマトである。この大量の朝食を、たっぷりをついた油といっしょに朝から食べるのだから、腹は常に満杯であった。

アパートに移ってから、近くのスーパーで買う野菜をたくさん食べ、日本的味つけの食事を食べているうちに全快したのである。もっとも日本的な味つけをただけで、日本米やミソ・しょう油の日本食を食べたわけではない。留学中、私は、イギリスの食事をすることを原則としてきた。従って、パンと紅茶かコーヒーを中心に、夕食は魚（狂牛病さわぎで牛肉が食べられず、それとなく肉食を避けてきた）、それにたくさんの野菜をとってきた。

イギリス流のブレック・ファーストの印象は、量が多い、油っぽい、しかし、まずいものではない、という感じであった。いえることは、太った女性の多いイギリス人をみていると、その理由がわかってきたのである。フィッシュ・アンド・チップスは油料理の代表である。

二つは、近くのスーパーである。たくさんの種類の野菜やくだものがある。コメなど、10種類以上の細いタイ米、インド米、中華米からアメリカのカリフォルニア米ときわめて多い。その他、肉、カンズメ、ワイン、ビール、野菜、何でも食材はそろっている。しかも安い。ただし、生の魚だけは、ごくわずかしかない。要は、これだけのたくさんの食材がそろっていて、料理がまずいはずがない、ということである。

実際、イギリス人は良く食べる。日曜日の公園、イベントの食事、電車の中などで、家族そろっておいしそうに食事をしているのをよく見かける。その大半は、手づくりのサンドイッチや菓子、サラダなどである。

こうした料理を食べ、ワインを飲み、議論をしながら1～2時間の食事を家族ですごしているのをみていると、食事をエンジョイしているのであり、食事がまずいはずがないのである。イギリスには、世界の代表といわれるほどの料理はないかも知れないが、豊富な食材を自からの味で料理する家庭料理があり、それがイギリス料理の特色といえるのではないか。

パンと紅茶

イギリスの食事の基本は、パンと紅茶である。私は、郷に入っては郷に従うとばかり、留学中、パンと紅茶をベースとして3食をすごしてきた。

イギリスのパンは、種類が多く、おいしく、しかも安い。二斤50～60P（約90円）で、さらに安いものも多い。パンに付けるバターやハム、ジャムなどの種類も多く、その意

味では何の不足もない。

ただし、米でなくパンを食べる理由はある。米は、スーパーで細長いタイ米からカリフォルニア米まで10種類余り売っていて不足しない。しかし、炊飯器がないし、水が悪いなどのために、日本のようにおいしく食べられない。たとえ、日本から「こしひかり」の最上等米を持参しても、それほどおいしくはない。コルチェスターは水が悪いせいかわ、どうしてもおいしく炊けないのである。米をおいしく食べるには、おいしい水とそれに合った炊飯器という道具がなければならないことをはじめて知った。

イギリスの水は、全体的にまずい。とくにコルチェスターでは、水道から水をくみ、コップに入れて5分位たつと表面に白い膜ができる。石灰質が多いためらしい。そうした水で米がおいしく食べられるはずがない。

同様のことは、日本茶にもいえる。水が悪いために、日本茶もおいしくない。加えて、日本茶を飲む急須がなければ、さらにである。紅茶用のポットは、穴が大きく日本茶が流れてしまい使えない。私は、日本から日本茶を持参してきたが、急須をロンドンで入手するまで、ほとんど飲んでいない。要するに、日本茶をおいしく飲めるのは、日本の良質の水と急須という道具があるからである。

パンを食べ紅茶を飲む理由は、すでにおわかりかと思う。イギリス人の食べるパンと紅茶あるいはコーヒーを飲むのが最良なのである。種類は多いし、おいしいし、安いし、これにこしたことはない。

ただし、私は、月に1～2度はロンドンに行くことにしている。その時は、必ず日本食堂に行き、さしみか寿司を食べる。この時のさしみと米は、格別においしい。生の魚と米を合わせた寿司は、正に、日本文化の原点ではないかと、改めて感動している。

コルチェスターには、寿司もさしみもない。魚屋に生の魚を売っているが、とくに、サーモン、カレイ、ヒラメ、タラなどがあるが、生のまま食べられるほど新鮮ではない。生の魚を食べる習慣のないせいかわ、ドロツとしていて食べる気にはなれない。日本とイギリスは、海に囲まれた島国であるが、生の魚を食べる日本人と肉食を主とするイギリス人と、何故、食文化がこうも違うのであろうか。

水問題

イギリスの水は悪い。もちろん、スコットランドなどの山間地域を除いてのことである。私の住むコルチェスターは、とくに悪いのかも知れない。石灰質が多いとのことであるが、とにかく、水道の水は、5分とたたないうちに表面が白い膜となる。コーヒーや紅茶でも同様である。

このため、一般家庭では、これをこす Water filter を使用しており、月に一度のフィルター交換で簡単にこすことができる。ただし、完全にきれいになるわけではない。どうしても気になる人は、市販のミネラル・ウォーターを使うしかない。しかし、毎日の

すべての水をミネラルウォーターでするわけにもいかず、結局、沸かして飲むこととなる。

なぜ、こんなに水が悪いのかを考えてみたが、イギリスの国がフラットだからではないかという結論となった。勝手な解釈だが、マクロには一理あるのではないかと考えている。

水は空から雨として地表に降る。ところが丘や平面しかないイギリスでは、この水がほとんど流れない。川や池の水は、いつもす黒く、よどんでいる。川には藻さえはえ、ほとんど流れていない。これでは、きれいな水ができるはずがない。他方、日本では、山間地域が多く、雨は山から川へ、そして海へと流れ、常に循環している。そのために日本の水は、いつも流動して自然にこされてきれいなのである。

広大に広がるイギリスの畑地や牧場をみていて、水の悪さの原因はこれだと合点しているが、その真意のほどはわからない。ただ、イギリスの都市には、必ず Water Tower という上水棟が丘の上に立っており、昔から水の確保に苦勞してきたことが推察される。

シャワーと風呂

イギリス人は、シャワーに入る。夏期の暑い時でも、乾燥しているためにアセをかかないし、シャワーで十分ともいえる。しかし、私は、風呂に入りたいと試みているが、なかなかむずかしい。

私のアパートは、シャワーと西洋式の細長い風呂がある。従って、横になって風呂に入れるはずであるが、しかし、むずかしい。その理由は簡単で、風呂に入るほどの湯が一度に出ないのである。要は、風呂に入る習慣がないので、湯わかしのシステムがそうになっていないのである。

私のアパートは、上に水のタンクが、下にお湯のタンクと思われる2つのタンクがある。電源を入れて30分位すると、湯のタンクが熱くなり、風呂に入ることができる。どうやら、湯のタンクのお湯がそのまま風呂に入るらしく、そのタンクの量より風呂の量の方が多いために、湯のタンクが空になると水になってしまうのである。かくして、湯に多くの水を加えて風呂にすべくトライするが、ついに足らなくて冷たくなってしまふ。この量では、いつも体がちょっと隠れるくらいで、風呂に入った気にはなれない。しかも、一人がすべての湯を使ってしまふと、水が湯になる30分余、次の人は風呂に入れないうこととなる。

なお、このシステムは、シャワー分の湯の使用だと、下の湯が徐々に少なくなる分だけ、上の水のタンクから下に水が流れるだけで、湯が常に出るということではないかと想像している。要するに、シャワーに合わせたシステムであって、風呂に入るシステムではないのである。スイッチ一つですぐに風呂に入れる、最近の日本の風呂がなつかしくてしかたがない。

不動産屋に、風呂に入りたいと文句をいったが、この機械は、2～3年前に買換えたばかりの expensive なものだ、と一言いわれただけである。あとは習慣の違いで、何とも言いようがない。ただし、最近では生活のチエで、何とか少いお湯を使って風呂に入っている。お湯とダマシダマシつき合っているという感じである。これしかないというアキラめでもある。

考えてみれば、確かにイギリスの夏期は、乾燥してアセをかかないのでシャワーでも十分である。シャワーも風呂も、その地域の気候に合わせたシステムであることに、つくづく感心しているところである。

暖房

イギリスの冬は寒い。そこで室には必ず暖房が入っている。赤レンガに暖炉とエントツのある家が、イギリスのかつてのイメージであった。ところが、最近では、電気かガスに代わり、暖炉が使用されずにエントツすらなくなりつつある。

私のアパートには、電気による暖房器具が各室についている。ベッドルームと勉強室には小さな、応接間と廊下には大きな、計4個のヒーターが入っている。これだけで寒い冬が大丈夫か心配でもあるが、不足の場合、足元用のファン、さらに湯タンポなどもあり、また、使用されているとのことである。

4月の中頃、時折、寒い日があり、また暑くなるという時期が続いた。暑いのでヒーターのスイッチを切り、寒くなったのでスイッチを入れたが、少しも熱くならない。小さなヒーターは、スイッチと同時に熱風が出るのだが、大型のヒーターは、少しも熱くなる気配がない。これは故障だと、不動産屋に電話をすると、担当者がとんできて、“ノープロブレム”といってスイッチを入れ、明日の朝まで待てといって帰って行く。そして熱くならなければまた来るといふ。翌朝、ヒーターはちゃんと熱くなっていたのである。

要するに、大型のヒーターは、スイッチを入れて半日余しないと暖まらないシステムのようなのだ。これは、イギリスの冬は寒いので、このベースとなるヒーターは、一日中入れておくのが常識であり、切ってはいけなないのである。せいぜい、ダイヤルで温度調節をするくらいで、11月から4月ぐらいの5～6カ月の間は、スイッチを入れっぱなしにしておくのである。それほど、イギリスは寒いということかも知れない。

しかし、室をみると、コンクリのせい、スキ間風はなく、ジュウタンが張りつめられた室内は、比較的暖かく保たれている。日本の東北や北海道は、外は寒いが室内は関東などより暖かいといわれるが、正に、その状況ではないか。室内での寒さ対策は万全なのである。

暗 部

イギリスは、日本と違う多くの良さをもっていることは確かである。しかし、外国人の我々にとってイヤな面が皆無というわけではない。

コルチェスターの市街地にも、ホームレスはいる。商店街の隅や地下道に座って、帽子を置いて金をせびる。視線が合うと「give me money」「change money」という。コルチェスター Council は、こうした市街地でのホームレス対策をしているようで、担当者がアドバイスしているところを見かける。しかし、なかなかゼロとはならない。イギリス人と思われる若者が多いのも特徴である。彼等は働く気がないのであって、金がないのではない。

外国人にとってイヤなのは、夕方や地下道での「マネー」である。地下道を歩いていて、2～3人の子供から「マネー」と言われた時には、ただ足早やに逃げるしかない。

郊外の街中では、黄色系の大人から「Change money」といわれたことがある。こうした時は、金を渡すなどして接するよりも、とにかく逃げることにしている。上の二つは、いずれもイギリス人ではなく、外国人であった。

イギリスは、異民族社会である。91年の国勢調査によると、300万人の少数民族出身者がいるといわれる⁵⁾。この内訳は、インド84万人、カリブ海諸国50万人、パキスタン47万人、アフリカ系黒人21万人、バングラディッシュ16万人、中国15万人である。日本人は、ロンドン周辺だけで5万人余いるとのことである。

こうした外国人の大半は、ロンドンなどの大都市周辺部に多く居住しているが、コルチェスターにも、外国人は見受けられる。これらの外国人は、イギリス人にとって「イエローかブラック」でしかないのである。

イギリスは、多くの民族を受け入れて長い歴史をもつために、「ホワイトとイエロー・ブラック」という区分のルールが確立されているような気がする。イギリス人は、よほど混んでいる時以外、バスや電車の中でイエローの我々やブラックの人々とは同席しない。

エセックス大学の図書館にはドアなしの自動エレベータがある。2～3人しか乗れないので、次々に自由に乗るシステムである。ここで学生の乗り方を見てみると、白人は白人、イエローはイエローという風に、同種の人々の場合に同乗するケースがほとんどである。無意識のうちに、選別しているのである。頭で差別はいけないとわかりながら、エレベータに白人や黒人が乗っていると、「避けて次を待つ」のである。これが人種差別の原点かもしれない。

コルチェスターの郊外に行った時、へいに大きく「Yellow」と書かれていた。これを見て「私もイエローなのだ」とドキッとしたと同時に、イギリス人の本音を見た気もする。イギリス人にとって我々日本人は、Japであり、「メガネをかけた、小さな、黄色い」⁶⁾人間でしかないのである。

毎年8月、イギリスは戦勝記念ムード一色となる。とくに昨年は、対日戦勝50周年記念(VJデー)を開催したこともあり、反日運動が活発化した。第二次世界大戦でビルマ・シンガポールでのイギリス人元捕虜が、その非人道的な抑留生活への謝罪と賠償を求めて訴えたのである⁷⁾。とくに、コルチェスターは、イギリスでの反日運動の拠点の一つだといわれる。

8月から9月にかけて、コルチェスターで開かれた野外音楽会に行った。そこで行われたオーケストラは、軍国調の戦勝ムードであった。それを聞いて、市民は英国国旗をかざして合唱するのである。

この光景は、我々日本人をせめているかの如くであった。多くのイギリス人にとって、日本人は、「金ばかり追求する、なり上りもので、独創性のない、イエロー」なのである。円高をよいことに、ロンドン周辺をショッピングする日本人には、こうしたイギリス人のきびしい視線があることを自覚してもらいたいものである。

2. 都市づくり

Church と Town Hall

イギリスの都市には、Church (教会) と Town Hall (市役所) が必ずある。この2つは、市民生活に欠くことのできない施設であり、市民生活のシンボルである。

現在の教会は、日本の寺と同様に、死者をとむらう場所であり、人々の精神的な信仰の場所である。しかし、その歴史をみると、中世から18世紀ぐらいまでの教会は宗教活動、埋葬・結婚、Parish 総会 (教区委員)、貧者の救済 (民生委員)、救貧法関係、税金の徴収、道路の維持管理、巡査などに関するすべてを総合した機能が与えられていたのである⁸⁾。

教会には、chesta という大箱が義務づけられ、それは、寄付金、献金、税金、埋葬簿、出生簿などの地域の住民に関わる重要物のすべてを納入するためのものであった。その鍵は3つ作られ、牧師、教区委員、領主がそれぞれをもち、金品の必要な折に、その鍵で開けていたという。

要するに、かつての教会は、現在の市役所、税務所、福祉事務所、警察署、教会などのあらゆる機能をもっていたのである。この教会を支えていたのが Parish (教区) であり、地域の代表者が地区委員として教会を支えてきたのである。

現在の教会は、宗教の場所であり、埋葬、結婚の場でもある。しかしその他の機能は分散され、その一つが Town Hall (市役所) である⁹⁾。

なお、現在のコルチェスターのタウンセンターには、15カ所の教会がある。1000年代の教会から現代の教会までを合計したものとはいえ、その数の多さに驚く。

このうち、現在でも宗教活動をしている教会は、6カ所余で、それらは、Parish Churchといわれる。Parishは教区といわれるが、周辺の人々が教会を中心としたコミュニティを作りながら、教会を支え維持管理しているもので、日曜礼拝などの日常活動を現在でも行っている。

3カ所の教会は、市の Museum として利用されている。これらの教会は、建物が古く、歴史的遺産として保存され、観光施設としても活用されている。その他の教会は、放置されたままの状況にあり、将来の施設利用が検討されているものといえる。その中でも古く歴史上の価値の高い教会は、修復され新たな観光施設として再建されつつある。

こうした教会の周辺には、必ず墓地があり、幾つかの古い十字架の墓がある。

上のような教会の現況に対して、Town Hall や Council は、市民の代表者が集まる市役所として、議会制民主主義の国、イギリスでは、市民にとって最も重要な現在の施設である。

イギリスのタウン・ホールと日本の市役所との大きな違いは、市役所の大きさに象徴される。イギリスのタウン・ホールは、Councillor (議員) の集まる Council (議会) であり、これが極めて大きい。そして近くに、市の職員の勤務する建物が小さく建っている。ところが日本の場合、市長を長とする市職員の仕事をする市役所が大きく、その近くに、議員の集まる議会が建っているのである。

イギリスのシステムは、議会制民主主義の国として、市民の代表である Councillor が最も高い地位にある。これに対する日本は、行政主導、官僚主導の下に、議員よりも市長部局の官僚が中心に行政を推進していることの象徴ともいえる。

いずれにしても、イギリス市民にとっては、過去の教会と現代のタウン・ホールはシンボルであり、最も重要な施設として都市の中心地域に設置されている。

Town Center の整備

Colchester (コルチェスター) のハードな街づくりを概観したい。

コルチェスター¹⁰⁾は人口15万人の都市で、その中心部に wall に¹¹⁾囲まれた Town Center 地区をもっている (図参照)。タウンセンターは、古都コルチェスターの政治行政の拠点であると同時に、商業・ビジネスの中心地であり、観光の拠点でもある。

地区内には、商店と事業所、教会などの観光施設、その他の公共施設が整備される一方、4分の1余のエリアには、Dutch Quarter (ダッチ・コーター) という住居地域が配置されている¹²⁾。人々は、このタウンセンターで Shopping からビジネス、観光、その他の行政関係サービスなど、ほとんどの活動の中心的サービスを充足している。

ショッピングの実態については別項でのべる。

タウンセンターでは、ローマン時代から中世にいたる多くの歴史的遺産を保存・修復するために様々な努力が行われている。教会を中心とする重要施設は、現状維持または

過去の復元を前提とした保存・修復が現在でも継続している。この保存・修復には、莫大な経費とプロフェッショナルな職人の確保などが必要となり、長期間にわたることが多い。すでに居住する一般家庭や事務所などの建物の増改築には、歴史的遺産を現状維持しながら保存する方針での強力な指導が行われている。建物の外面は現状のままに、内面だけの改修を図るなどの工夫により、街の景観が大きく変更されないような景観的配慮が十分に確保されている。

駐車場の整備は、センター内の交通量の抑制と来訪者の車対策として重要である。一般市民向けに、ウォールの四方に大きな駐車場を設け、ビジネス、観光、ショッピングなどの人々のために供している¹³⁾。業務用の車のためには、地下駐車場を整備してウォール内の事業者へのニーズに応たえている。ウォール内に入る車を少なくするために、様々な対策がとられている。人々は、これらの駐車場に車を駐車させ、ウォール内を徒歩で用事を済ませるということになる。

ウォール内には、公衆トイレが8カ所、市民向けに整備されている¹⁴⁾。これは Borough Council 所管で、きれいで、無料で、多くの市民に利用されている。トイレは、きめ細かく清掃され（一時間に一度ぐらいのパトロールがある）、チリ紙がつき、「洗剤、水道、温風ヒーター」の3点セットが必ず取り付けられている。イギリスでは、トイレが汚れていたり、有料であったり、どこにもなかったり、というところが多いが、ここでは、その解消が図られている。

他方で、ウォール内の商店などの施設には、ほとんどトイレがない。公衆トイレを利用することが前提となっているとあってよい。意外に思ったのは、中心部にある Essex County の図書館にもトイレがない。トイレは公衆トイレを利用して欲しいとのことであった。日本では理解できないことだが、これほど徹底しているのである。もっとも、障害者用のトイレだけは用意されている。

図書館は¹⁵⁾、大きな2階建の図書館で、たくさんの市民が利用している。図書館の整備は、Essex County の所管で、タウンセンター内の商店街の中央部にある。一階は音楽関係の資料で、ビデオ・テープの貸出も多い。二階は一般向けと児童向けで、いずれも多くの図書が開架式で自由に利用できる。二階のもう一室は「Local」関係の図書で、Essex County や Colchester Borough その他の地方団体関係の多くのデータが集まっている。

この図書館は、音楽と local 関係に重点をおいたもので、関係の専門職員が配置されていて様々なアドバイスをするシステムになっている。外国人も自由に出入りでき、私は、外国人登録証を見せながら借出利用券をもらうこともできた。多くの一般市民が気軽に利用しており、市民の情報源として親しまれているといえる。

タウンセンターの北東には、Castle Park があり、その入口はハイストリートに面している。カースル・パークの詳細は別でのべる。

カースルパーク入口の反対側の道路には、インフォメーションセンターがある。コル

チェスター Borough Council の直営で、市内の様々な情報については、ここが担当している。とくに、観光客には、市内の観光案内をすると同時に、ホテル、ホームステイなどのあっせんもしている。イギリスの都市や主な駅には、必ずこのインフォメーションセンターが①の印であり、観光客への何でも相談の窓口になっている。

タウンセンターの周辺には、スーパーのTesco、家具・雑貨店などの大規模店が数店進出している。大きな駐車場をもつこれらの店は、センター内の商業施設のライバルともなりつつあり、土曜、時には日曜日の開店により、車を利用する買物客の集約を図っている。

周辺には、幾つかの既存の住宅地が整備されているが、新たなニュータウンの開発も行われている。コルチェスターは、市域が広いこともあり、人口増が続いているが、これは、こうした周辺地域における住宅地の開発が除々に進行しているためである。ロンドンに50キロ余の立地条件は、都市化の拡大とともにロンドンへの通勤圏となりつつあり、すでに通勤時間帯には、ロンドンへと通うサラリーマン層が増加しているという状況にある。

コルチェスター Council は、タウンセンター地区を中心に歴史的遺産の保存修復を図りつつ、新たな開発へのニーズを受け入れ、バランスをとりながら街づくりを進めてきたもので、現在のタウンセンターは、そうした努力の産物でもある。

弱者にやさしい街づくり

イギリスの街を歩いて気がつくのは、弱者にやさしい街である点である。弱者の中には、高齢者、障害者、母子などが含まれるが、それらの人々が、健常者と同様に扱われ、また、自信をもって活動しているためである。

たとえば、高齢者である。コルチェスターには、高齢者が多く見うけられるが、街中での買物、公園、バスなどすべての施設の中で、高齢者は、健常者と同様の行動をしている。人々は、高齢者とわかれば、その歩調に合わせてゆっくりと歩き、車などは、早めに止まって歩きゆくのを待つという状況である。必要に応じてケアしていることは言うまでもない。

バスでは、その速度に合わせてドアの開閉をゆっくりしたり、とにかく、見ていて高齢者に大事に対応していることがわかる。うらやましい限りである。電車の駅でも、高齢者への対応が行われている。高齢者の荷物を駅員がもったり、誘導して電車に乗せたりすることは、常に行われていることである。

なお、高齢者で忘れられないことは、高齢者が街中で仲良く手をつないで歩く光景である。日本で70~80歳に近い高齢者が手をつなぎながら歩く姿を見たことはほとんどない。習慣が違うとはいえ、見習いたいことのひとつである。

障害者についても同様である。disability といわれ、様々な分野でその対策が行われて

いる。最近多くみられるのは、障害者による買物であるが、これは、shopmobility と¹⁶⁾いう Borough Council によるサービスの一環である。障害者に買物をしてもらうために電動の車いすを貸出し、障害者単独あるいはヘルパー同行で、センター内でのショッピングをするというものである。

あるスーパーでの光景である。一人の視覚不自由と思われる客に、一人の店員がついて棚の商品を説明し、ショッピングをケアするということまでしているのである。

とにかく、イギリスで気のつくことは、電車、バスなどの乗り物に、車いすや乳母車の母子、さらには犬、自転車などが人間と同様に乗車していることである。公共の乗り物は、こうでなければいけないとつくづく考えさせられる。それには、日本でのラッシュアワーのような混雑では不可能で、日本がイギリス並みとなるのは、まだまだ先のことであろう。

いずれにしろ、障害者が車いすで歩行するためには、建物の出入口が広い、段差がない、自動ドアにするなどの様々な問題があり、街全体の再点検が必要となる。コルチェスターでは、当面、タウンセンターの商店街に限定してこの Shopmobility の政策を進めているとのことで、まだ、街全体でないことは言うまでもない。

母子が乳母車で街を歩くというのは、イギリスのどこの街でも見かける光景である。もちろん、ロンドンなどの大都市では例外としてであるが、家族がいっしょに行動するのは当然であり、そうしない方がおかしいとさえ考えられていると思える。バスに乳母車が上り、母親が乳母車を折りたたみ席に座るまで、運転手はバスを止め待っている。私など、初めはイライラしていたが、そのうち、これがむしろ当然ではないかと考えるようになった次第である。スーパー、デパートなどの商店にも、乳母車は当然のように出入りする。買物する母親の行くところは、すべていっしょなのである。

要するに、高齢者、障害者、母子などの、いわゆる弱者は、街の中で健常者と共に生活するのが当然であり、それが可能な街をつくるのが、これからの街づくりであろう。そのためには、全体のシステムを改善すると同時に、身近にいる健常者のケアが常に必要となることを再確認した。

ショッピングと市民生活

コルチェスターのタウンセンターは、事務所とダッチコーターの住居を除くと、その大半がショッピング施設といえる。

High Street (ハイストリート) をはじめ、センター内の主な道路には、様々な商店が並んでいる。さらに Red Lion 地区や Culver 地区などの再開発地区は、ニューデザインの商店が若者向けのファッションに合わせたショッピング店が多い。こうしたショッピング街に、マークス・スペンサーやセズベリーなどの大手スーパーが配置されている。

人々は、こうした一大ショッピングエリアで、日用品の買物や、観光向けの買物など、

そのニーズに応じたショッピングを楽しんでいる。商品は、ファッションよりも実用品が多く、そう洗練されているわけではない。高級品よりも一般向商品が多く、品物は安いという感じである。市民はショッピングをエンジョイしているのである。

ここで日本と大きく違うところがある。こちらの商店は、ウィークデーで5時半位で閉店となり、日曜日・休日はすべて休業となる。従って、常時、人々が一杯であった通りや街中は、5時半以降あるいは日曜・休日には、誰もいない静かな街になってしまう。ウィークデーの5時半以降、これらの街を歩くと、人々はほとんどいない。開店しているのは、パブ、バー、レストラン、ホテルの食堂、ピザハウスなどのアルコールを中心とする店のみである。これらの店は、若者や仕事帰りのサラリーマン層でにぎわっている。

パブは、日本の赤ちょうちんという感じで、サラリーマンがカウンターに立ちながら雑談をしている。彼等の多くは、つまみをとらずに、ビールなどのアルコールを飲み、仕事帰りに1時間余寄り、家に帰るというパターンであろう。

パブ・バーなどで若者向の店は、若者が飲みながら雑談したり、ゲーム、踊りなどを行っているという店で、若者の唯一の娯楽の場所となっている。レストラン、ピザハウスなどは、家族向や低年層向という感じである。

イギリスの多くの都市は、コルチェスタだけでなく、地方都市のほとんどは、商店の閉店時間である5時半頃を境に、街は、家族一般の街から夜の大人の街へとムードを変えていくのである。

Castle Park

コルチェスターのタウンセンターには、Castle Park (カースル・パーク) という公園が¹⁷⁾ある。市街地の中心部にこれだけの広大な公園があるのは、すばらしいの一言である。

カースル・パークは、その名の示す通り、カースル(城)の公園であり、コルチェスター Borough Council が管理している。ハイストリートに面した公園の入口から Colne 川まで約200キロ平方メートルの広さを持ち、徒歩で一周すると一時間弱を要する。私のアパートはこの2～3分なので、毎日一回は散歩するように心がけている。

公園の中の古城は、ローマン時代の赤のレンガと石造りで、Museum として開館され、観光客を集めている。ここでは、コルチェスターに関するさまざまな歴史的資料を展示し、市民の歴史的関心を集めている。

公園は、ウォールから上の Uper Park と下の lower Park に分かれ、周囲を高い鉄のヘイに囲まれている。夏期には22時頃まで、冬期には17時頃まで開館され、多くの市民が訪れる。アッパー・パークの庭には、100年余のマロニエの大木やその他の多くの木々と広い花壇があり、その多くは芝生に覆われている。隅にはコーヒー店やトイレがあり、

来訪者の憩いの場所となっている。

花壇には、四季に応じて様々な花がきれいに植えられ、訪れる人々の写真のバックとなっている。とくに、春から夏にかけては、水仙、チューリップ、パンジー、スマイレ、バラなど、シーズンを代表する美しい花々がきれいに植えられ、人々の目を楽しませてくれる。その美しさは、プロの庭師がシーズンに合わせて花を変え、デザインを変えているもので、感心させられる。

ローウア・パークは、ウォールの下で、ここには、広い芝生とボート遊びのできる池とコールネ川がある。池と川の水面には、多くの野鳥が訪れ、川沿には、多くの野草が咲き、季節の香りを高めている。

広大な芝生は、市民の憩いの場所として広く使われている。4月から9月の春から夏のシーズンには、土・日を中心に毎週、何らかのイベントが開催され、多くの市民が集まる。とくに、夏期は、この芝生を野外スタンドにして音楽会が開催され、多くの市民に親しまれている。コルチェスター Council では、レジャー行政を行政サービスとして担当しており、このシーズンのイベントを主催している。また夏の夕方6～7時頃には、子供連れの家族がサッカーやボール遊び、夕涼みなどで利用している。

この活動内容をみると、公園や芝生は、市民のために自由に開放され活用されている。うらやましい限りである。とくに、日本では、芝生に人を入れないが、芝生に人を自由に入れ、時には車さえ入れて使うイギリス流をみていると、これが真の芝生や公園の使い方ではないか、と考えさせられる。そもそも日本では、公園に体育館やテニスコート、グラウンドなどのハコものの施設を作り、形だけのみどりの芝生しか植えない。イギリスでは、芝生と木々が中心で、一部に池や施設があるだけである。まだまだ日本の遅れを感じざるを得ない。

ちなみに、公園や一般家庭にある木々を挙げておこう。カシ、ブナ、ポプラ、白樺、マロニエ、プラタナス、サクラ、柳、モミジ、ぼだい樹、一いの木、ハンの木、イチョウ、クリ、アカシア、フジなど。

池には、野鳥がたくさん集まっている。白鳥、カモ、カナダガン、大バン、バン、カモメ、カササギ、ブラックバード、ホシムクドリなどで、多くが人々を怖れずエサを求めて集まってくる。白鳥は、近くの川で子供を育て、そのまま川にいついてしまっているのである。これらの野鳥をみていると、イギリス人は、自然を愛し、それを育てるために努力をしてきた国民だということがわかる。

コールネ川沿には、四季折々にたくさんの花々が咲き、市民の散歩を楽しませている。タンポポ、昼顔、デージー、アザミ、スマイレ、ノコギリ草、忘れな草、水仙、ショウブ、蒲の穂、センノウなど。

みどり・公園

イギリスには、Park、ground、field、spring、woodなどの公園や緑地（みどり）を示す場所が多い。都市の周辺には、多くのみどりが計画的に配置されている。これを見ていると、イギリス人は、みどりや自然を愛し、親しむ国民であるをつくづく感心する。

カースル・パークは、別稿で書いたが、マロニエの大木をみていると、100年以上の歴史があることがわかる。日本との違いは、みどりを大切にするという歴史と文化の違いであろう。

コルチェスターから30分ぐらいのところに、Highwood Country Parkが¹⁸⁾ある。これは、コルチェスター Councilが管理する森に囲まれた、いわば自然公園である。大きな池があり、それを囲んで芝生が広がり、さらに周囲を森林がとり囲むというパークである。池や森には、多くの野鳥が訪れ、正に、動植物の楽園である。

この一角には、ビジターセンターが一つあり、Councilの職員が常駐している。この他には、建物らしきものは何もない。担当職員は、訪れる人々からの質問に応じて動物や植物の解説をし、アドバイスをしている。小学生がグループで訪れ、野外活動の一環として指導を受ける光景も見られる。この他に、何人かのボランティアがグループ毎に集まり、草を刈ったり柵を直したりと、さまざまな仕事を分担している。

少しはなれたところには、Lexden Springsというみどりがある。ここは、道路沿いの斜面を利用した緑地であり、小高い丘の一面は、芝生で覆われている。その中にカシやマロニエの大木がポツンと立っている。下枝をとり、上へと大きく延びるようにせん定した木は、20メートル余の高さにのび続けている。

人々は、夏の強い日ざしの時に、この大きく広げた木の下で休むのである。そのために広い芝生に大木をポツンと植えているのであり、大きなカシの木の下でということになる。こうした緑地には、センターも何もなく、ただ広い芝生・ベンチと木々が植えられているだけである。その代わり、芝生はきれいに刈られ、ごみ一つ落ちていない。誰がいつ掃除するのかかわからないが、管理だけはキチットしている。近くの立て札には、「犬のフンを取ることを、ゴルフや馬の走行は禁止すること」と書かれている。馬を飼い乗る人がいるのであろうから、日本では想像もできない。

人々は、天候の良い時に、こうしたパークや緑地に、家族で弁当をもって訪れる。いわゆるピクニックである。もっとも市街地の商店街は、日曜・休日にすべてが休んでおり、他に行くところがないという面がないではない。

それにしても、日曜日や休日に、近くの公園やみどりを家族で訪れ、一日をすごすというのが、イギリス流の休日のすごし方である。これらの光景をみていると、のんびりとした一日がすぎ、正に、生活をエンジョイするとは、このことではないかと思われる。

こうしたみどり、緑地が都市の周辺のいたるところに点在しているのであるから、うらやましい限りである。ただし、そこには、次のような問題点も挙げられる。

一つは、市内にあるこの種の緑地・みどりは、多分、広大な広さになるであろう。中にある芝生を刈り、木々の管理をするには、相当のコストがかかる。芝生など6～7月の最盛期には1週間余でのびてしまう。それをいつ行っても伸びすぎないほど良い状況に刈ってあることは、それなりの見回りなどのチェックと管理が必要となる。朝夕には、担当者が草刈り車で芝生を刈っているのをよく見かける。

芝生などみどりの管理のむずかしさは、生き物であるために、永久に需要がへらずに拡大する点である。日本でみどりの維持管理のむずかしさは、このコストの増大にある。みどりの拡大が行われなないのは、コスト増にあるとも言えるからである。

二つは、都市化が進むにつれて、こうした緑地が少くなりつつあるのも事実である。緑地のすぐ背後には、住宅地がおし寄せるといふ光景はしばしば見られる。Public Footpathもその一例であろう。フットパスは、CountyまたはBoroughの管理する小径で、人々がこれらの緑地を歩くためには、それをつなぎ歩ける唯一の道である。Essex Countyの全域に、主要な緑地をつなぐ足のネットワークとして、これらのフットパスは整備されている。

Public Footpathの歴史は、広大なprivateの私有地をつなぐものとして整備されたものであり、多くの場合、private estateの境界線となっている。従って、都市化が進み個人の私有地が開発され、このフットパスが切断されてしまうこともある。その前兆は、開発の進む地域のフットパスの多くは、管理が不十分でゴミなどがすてられていることがある。

開発でみどりが破壊されていくのは、イギリスも日本も同様のようである。イギリスの場合、ナショナル・トラストやイングリッシュ・ヘリテイジの団体が、自然保護のために活動している。

道路問題

イギリスの道路に関わる問題を日本と比較しながら概観してみたい。

車は右ハンドル、左交通であり、日本と同じシステムである。しかし、車は古くボロが多く、今にも壊れそうな旧式が走っているが、これは、車検などによる規制がきびしくないためである。車のスピードは早いが、その代わり、人が信号で待てば、すぐに止まってくれる。これが運転手のマナーでもあるらしい。

道路は、歩車道が分離して広い。この広い道路に、すいているせいか、フルスピードの車が走るの、近くの歩道を歩いていても怖いことがある。スピード制限はないのではないかと思われる。こうした道路には、歩行者優先のために、ゼブラといわれる特別の黄色のランプが点滅する信号があり、ここに人が立つと、車は、必ず止まって優先してくれる。人は安心して通れるようになる。車は、道路をスピードを出して走っているが、歩行者優先も忘れてはいない、という感じである。

道路の交差点は、信号のない Round about (ラウンド・アバウト) である。車は、円形の交差点に信号がないので止まる必要はなく、円形に沿って右回りに回転しながら自分の行きたい方向に出ていくというシステムである。このラウンド・アバウトは、慣れないとむずかしく、中の円を何回か回転してしまうとのことである。とくに、2車線道路のラウンド・アバウトは、さらに複雑で、よく事故が起こると聞く。

ラウンド・アバウトは、車にやさしいシステムだという。交差点の信号がないので、車はノンストップで走ることができる。止まるテーマが省けるのである。信号での停止が少ないので車の渋滞が少ないと思われる。この意味では、日本でも導入したらどうかと思われる。しかし、日本では車が多すぎてむずかしい、さらに交差点が広くないとだめで、日本の交差点は狭すぎて回転できないともいう。要するに、システムに合う条件がないと、単純に結果だけをマネするわけにはいかないのである。

歩行者は、信号が赤であろうと平気で道路を渡る。信号が赤や黄であろうと、車さえなければ危険ではなく、すぐに渡っていく。「信号が青以外には渡ってはいけない、渡る人はマナーが悪い」という考え方の日本とは大違いである。要するに、道路は人間のためにあるのであり、車がなければ、信号が赤であろうと無関係に通ればいいのである。これがイギリス流である。むしろ、イギリス流の方が合理的ではないかと発想を変えつつあるが、日本で通用するであろうか心配である。

最後に、日本に導入すべきと思うのは、道路を凸させて車のスピードを制限させる uneven road (デコボコ道路) システムである。住宅の入口、学校、大学、公園などの入口には、この凸システムが導入されている。道路が凸っているために、車は必ず徐行して走るのでスピードを下げざるを得ない。人間優先の場所では、道路を凸させておくことで、車に物理的な警告を与えるのであり、日本でも導入すべきシステムだと思う。

もう一つ日本で考えられないのは、ガソリンの自由化である。イギリスのガソリンスタンドは、ほとんど無人であり、ガソリンを入れる機械だけがおいてある。運転手は、ガソリンが少くなるとガソリンスタンドに止まり、自分で好きなだけガソリンを入れ、事務所に行って料金を支払う仕組みである。

もちろん、スーパーなどが経営するガソリンスタンドがたくさんあり、すでに2～3割のシェアがあるという。ガソリンも、他の製品と変わらないのである。行政の規制緩和すべき事例の一つであろう。

街づくりと Station

イギリスの街づくりの特色の一つは、街の中心街と電車の Station (駅) とが分離していることである。コルチェスター市内には、コルチェスター North とコルチェスター Town という2つの駅がある。これらは、ともに中心街から少しづつ離れて立地している。

ノース駅は、ロンドン（リバプール・ストリート）から50分余の駅で、イプスウィッチ、クラクトンなどの北東海岸へと向かう大半の電車は、ここに停車する。ロンドンへは、1時間に2～3本とあり、ロンドンへの窓口となっている。ノース駅からコルチェスターの中心街には、バスで5分余、徒歩で15分余である。ノース駅周辺は、事務所や住宅地が広がり、商店などほとんど見当らない。コルチェスターのタウンセンターから、市民は、車またはバスか徒歩でノース駅に行くこととなる。駅と街の発展とは無関係である。

タウン駅は、タウンセンターの南端にある。しかし、その本数が少ないこともあり、駅の周辺は、そうにぎわってはいない。タウン駅は、ノース駅から10分余の一駅とはいえ支線であり、本数は、一時間に一本余でしかない。従って、人々の利用はきわめて低い。電車は、ノース駅からタウンセンターをはじめとするコルチェスターの市街地をう廻して半周する形でタウン駅へと走っている。これは、タウンセンター内の歴史的文化遺産を保存するためにう廻したものといえる。

いずれにしろ、街づくりと電車の駅とは分離した状況にある。コルチェスター市内の市民の足は、車かバスである。市域が広いので、多くの市民は、車を利用していると思われるが、しかし、買物、通学などには、バスも多く利用されている。市街地での市民の足はバスである、と考えてよい。

コルチェスター市内には、道路に合わせたバス路線網がネットワーク化している。こうしたバス利用は、イギリスの多くの地方都市で見られる特色である。日本と比べ、面積が広いので、道路での渋滞もないためか、バスは一般市民の日常生活での足となっている。

引用文献

- 1) 『イギリス』JTB, 192頁
- 2) 木内信敬監修『イギリス』実教出版, 18頁
- 3) Colchester Borough Council『Colchester 800』11頁
- 4) 『University of Essex』Essex 97
- 5) 「英国ニュースダイジェスト」96年7月4日号
- 6) マークス寿子『戦勝国イギリスへ 日本の言い分』草思社 107頁
- 7) 同上, 52～65頁ほか
- 8) Joy Richardson『Looking at Local Records』
- 9) 『The Town Hall Colchester』
- 10) Colchester Borough Council『Colchester』
- 11) Barbara Buther『Walking the Walls』
- 12) 『Guide to Colchester's Dutch Quarter』

- 13) East Anglian 「Parking in Colchester」
- 14) Colchester Borough Council 「Public Toilets Information」
- 15) Essex County Council 「Essex Libraries Request Service」
- 16) Colchester Borough Council 「Colchester Shopmobility」
- 17) Colchester Borough Council 「Colchester Castle」
- 18) Colchester 「High Woods Country Park」